

つりおんな

釣女

〔解説〕昭和十一年（一九三六）初代鶴澤道八の作曲、榎茂都陸平の振り付けで四ツ橋文楽座で初演された景事です。明治十六年（一八八三）狂言の「釣針」を元に常磐津の「釣女」が作られ、明治三十四年（一九〇一）「戒詣恋釣針」という題名で歌舞伎の舞台劇として上演されました。本作は、これを文楽に取り入れたものです。能を原点とする演目には「寿式三番叟」「勸進帳」等がありますが、その厳肅な雰囲気とは異なり、本作は狂言ものならではのユーモアが人々の笑いを誘う作品です。

〔あらすじ〕ある独身大名が妻を授けてもらおうと、同じく独身の太郎冠者（たろうかじゃ）を共に西宮の恵比寿様に詣でます。その夜早速「妻となるものは西の門にいる」とお告げがあり、行ってみると釣り竿が一本落ちていました。釣の好きな恵比寿様が、これで妻を釣れということだろうと、大名が試みてみると、世にも稀な美女が釣れます。二人の仲むつまじさを見た太郎冠者が焦って自分も釣り糸を垂れると、やはり女性が釣れます。喜んだ太郎冠者が、末永く添い遂げることを誓ってかぶり物を取ると、フグのような醜女だったのでした。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

（一般社団法人 義太夫協会発行）

抑もこれは猿樂の、昔よりしてその業の、おかし
といひし狂言師、名に大蔵や鷺流の、姿を写す釣女。
「かやうに候ふ者はこの所の大名でござる。ヤ
イ、太郎冠者あるか」

「ハア」

「あるか」

「ハアお前に」

「ゐたか」

「ハア」

「ねんなう早かった。汝も知るごとく、この年まで
定まる妻がない。承れば西の宮の恵比須三郎殿は福
者と申すこと。これへ参り妻を申し受けうと存ずる
が、何とあらうぞ」

「これは一段のことではござりまする」

「さらば汝供をせい」

「参ります〜。誠に仰せのごとくでござる。西の
宮の木比須三郎殿へ参るがようござりませう。私も
定まる妻がござりませぬによつて、ついでながら申
し受けませう」

「扱々おのれは率爾なことをいふものぢや。恵比須
三郎殿とこそいへ、木比須三郎と申すことがあるも
のではない」

「ハテ絵にかいた折は恵比須三郎と申し、木で造つ
た折は木比須三郎と申しまする」

「なかなか、汝は物知りでおりやる。それがしは道
不案内ぢやほどに、名所旧跡を語り聞かせよ」

「畏つてござる」

「さらば急いで参らふ。サア〜来い〜」

「参ります〜」

「サア〜来い〜」

「参ります〜。イヤナウ〜頼うだお方、まづ参るほどにこれがはや」

『小唄に唄ふ奈良法師、行くも戻るも心のとまるも山崎の〜女郎と涅槃の長枕。結ぶ縁しの尼ヶ崎。』

「面白い〜。シテ向ふに見ゆる山はなに山ぢや」

「ハテあれは山でござる」

「こなやつ。山は山ぢやがなんともうす」

「ム、ハア、なに山は、山でござる。ヲ、それ、それ、あんの山から、こんの山へ、飛んで出たるはなんりやるろ。頭にふつふと二つ細ふて、長ふてりんとはねたをちやつとすいした。兔ぢや」

『ハ、ハ、ハ、ハ』

「なにをもうすぞ。シテ西の宮はまだか」

「もはやこの森のうちでござりまする」

「さらば参詣をいたさう。手水〜」

「ハア」

「まづ鰯口に取りつかふ。ぢやぐわん〜、いかにもうし上げ候。われこの年まで無妻なり。三郎殿の利益にて、定まる妻を授けたまへ、授けたまへ」と一心こめて伏拝む。

「ヤイ〜太郎冠者。汝も拝め」

「畏つてござる。ぢやぐわん〜。いかに木比須三郎殿もうし候。われも定まる妻はなし。似合ひ相應美しき、妻をお授け〜」

と三拝九拝したりける。
「ヤイ〜太郎冠者。今宵は通夜をせう。汝もまどろめ」

「畏まつてござる」

アラとうとや〜、内陣のうちぞゆかしきわが妻を、

千代と契らん手枕の、袖を覆ふて、まどろみしが、
ほどもあらせず夢さめて

「ヤイ〜お告げがあつた〜。汝が妻になる者は、
西の門の一の階にあらうほどに、つれて帰れとお告
げがあつた」

「これはいかなこと、私がお告げもそのとほり」

「いそいで参らう」

「参ります〜」

勇み悦ぶ足元に、落ちたる竿を取上げて

「ヤこれはいかなこと、妻ではなうて、竹の先に糸
がついてある。これはなにであらうぞ」

「ハハ不思議なお告げでござりますな」

「ヤこれは悟つた。恵比須殿は普段釣竿を放さず釣
ばかりしてござるによつて、この針で妻をつれとい
ふことであらう。まづ急いで釣りませう。エイ〜」

釣ろよ〜、神の教への釣針を下ろしめよき妻を
釣ろよ〜。

「ハ、ハ、ハ、ハ」

針をおろせば

「ヤイ〜、太郎冠者かかつたわ〜」

「ナニかかりましたか」

「とても〜、おもしろい女ぢや。チャット来て腰を取

れ〜」

「畏つてござる」

「ハアテそれがしではない。お妻さまの腰を取れ」

「心得てござる」

『エイ〜、ヤアットナ』

不思議やな気高き女を釣り上げて

「アラありがたや〜、さてもよい妻がかかつて〜
ござる。うれしや〜」

「なにがさてお悦びでござる」

「コレ／＼そなたは定まる妻ぢやによつて目を掛けてやるほどに、夫を大事にしませうぞ。ヤ小野小町か楊貴妃か、アラ美しや／＼」

「イヤ申し／＼道々こつそり楽しまうと、背中へ入れて来たこの吸筒、お二人さまの三三九度。これにて目出たう御祝言」

「ヤこれは一段のことぢや、サア／＼つげ／＼」

「心得てござる」

「まづ女子の方よりさしませい」

「心得ました」

「申しわが夫、かならず見捨てて下さるな」

「なんの見捨ててよいものか」

「才、嬉し」

「ヤイ／＼太郎冠者、祝して一つ謡うてくれ」

「心得て候。高砂やこの盃が」

「二世の縁、神の御前で祝言は、三郎さまがお媒人、よしそれとても浮気心があるならほんに、罰が当るであるぞいな。かならず見捨て下さるな」

『やいのやいの』と寄添へば、そばに聞きあふる太郎冠者、気をもみあせり

「ヤ申し／＼、その釣竿を私にお貸し下され。見事釣つて見せませう」

「はやう釣れ／＼」

「イヤモ釣る段ではござらぬ。まづおこ人様はそれにて御見物下さりませ。まづ／＼／＼、エイ／＼釣ろよ／＼、釣るものは何々、鯛に鯉に恵方棚に撞き鐘、信田の森の狐にあらぬ。釣針をさげて、おろして、三十二相揃ふた十七八を釣らふよ／＼。おかつさんを釣ろよ」

よねんもながき鼻の下。

「ヲ、当るぞく。どっこいしめた。アラとうとや、掛ったわく。サアくこちへござれく。ア、嬉しやく。サアくこれからは三三九度の盃ぢや。なにも恥しいことはない。そなたと夫婦になるならば春は花見夏は涼み、秋は月見の酒盛りに、冬は雪見のちんちん鴨、天にあらば比翼の鳥、地に又あらば連理の枝、必ずそもじは変るまいな」

「なんの変つてよいものかいな」

「ヤレ嬉しやく、まづなにはともあれ御面相を」と被衣かぶぎを取れば『こはいかに』鯁かぶに等しき醜女ゆゑ「ヤアわごりよは鬼か化物か。のう消えてなくなれ

く

「のうくわが夫、今仰つた楽しみは嬉しうてく、わたしや忘れはせぬわいな」

「ヤレ情ない赦ゆるいてくれ、く」

「そりやつれないぞえ、太郎冠者殿。コレこつちら向かんせエ、くなんぢやいなア。思へば深い恋の洩沈むわが身を釣糸に、結んだ縁の西の宮、蛭子ひるこまうけて、二世三世、変わらぬ色は棹竹の末葉栄ゆく夫婦中、放れはせじ」と取すがる。

「のう恐ろしやく」

「ヤイく太郎冠者。三郎殿の授けたまひし妻ぢやによつて、いなおうはなるまいぞ」

「ア、そなたさまは、よい月日の下でお生まれなされた。この太郎冠者は月も日もなく、暗闇で生まれたと見えます」

「なにはともあれ、目出たふ舞ふではないか」

「エ、勝手にさっしやれ」

高砂やこの浦船に帆をあげて、月諸共に舞の袖、女
蝶男蝶の仲もよく遠く鳴尾の沖の石、堅い契りは住
吉の、千代に八千代をかけ橋や、千秋万歳の千箱の
玉を奉る。

「目出たいな」

「へんお目出たふござります」

「それがしが妻はいづくへ参った。アレ／＼太郎冠
者が身共の妻を連れて行きをる。アノここな横着者」

「ナニ太郎冠者が美しい女を連れてゐたとナ。エ、
腹が立つ／＼、くひついてやる／＼」

「アノここな横着者、やるまいぞ／＼」

「腹の立つ／＼、くひさいてやる／＼」

えほんたいこうき

絵本太功記

〔解 説〕寛政十一年（一七九九）大坂豊竹座初演。近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作による全十三段の時

代物です。明智光秀が主君織田信長を討った本能寺の変から、光秀が秀吉に討たれるまでの十三日を十三段にあてはめて描いています。中でも十段目「尼ヶ崎の段」は俗に「太十（たいじゅう）」と呼ばれこの作品を代表する名場面となっております。登場人物の名称は仮名手本忠臣蔵同様、幕府の検閲から逃れるために変えて書かれています。

〔あらすじ〕主君尾田春長の横暴な振る舞いを諫めたことにより、領地没収となった武智光秀は、本能寺に夜襲をかけ春永を討ちます。備中高松城を攻めていた春長家臣真柴久吉は取って帰して光秀討伐となります。光秀の母さつきは、主君を討った光秀に立腹しており、家臣の四王天田島頭や光秀の妻操の願いも入れず、一人尼ヶ崎に転居してしまいます。光秀は母の心に感じ自刃しようとしませんが、四王天と息子十次郎に諫められ、改めて天下取りの戦へと向かいます。尼ヶ崎のさつきの閑居へ、光秀の妻操と息子十次郎の許婚初菊が訪ねてきます。そこへ旅の僧に身をやつした久吉が一夜の宿を乞うのでした。出陣の挨拶に訪れた十次郎は初菊と祝言をあげ戦場へ向かいます。

〔尼ヶ崎の段〕最前から様子をうかがっていた光秀が現れ、旅の僧を真柴久吉と見破り襖越しに刺しますが、そこにいたのは母さつきでした。敗戦の様子を告げに戻ってきた十次郎は深傷に息を引き取り、光秀と久吉は他日の決戦を誓って別れるのでした。

尼ヶ崎の段

一間へ入りにけり

残る荅の花一つ、水上げかねし風情にて、思案投げ
首しをるゝばかり、やう／＼、涙押しとゞめ

「母様にも祖母様にも、これ今生の暇乞ひ。この身の願ひ叶ふたれば、思ひ置く事さらになし。十八年
がその間御恩は海山かへがたし。討死するは武士の習ひと思し召し分けられて、先立つ不孝は赦してた
べ。二つにはまた初菊殿、まだ祝言の盃をせぬが互ひの身の幸せ。わしが事は思ひ切り、他家へ縁つき
して下され。討死と聞かぬならば、さこそ嘆かん不便
や」

と、孝と恋との思ひの海、隔つ一間に初菊が、立ち
聞く涙転び出で、『わつ』とばかりに泣き出だせば。

『はつ』と驚き口に手を当て

「ア、コレ／＼声が高い初菊殿。さては様子を」

「アイ、残らず聞いてをりました。夫の討死遊ばす
を、妻が知らいでなんとせう。二世も三世も女夫ぢ
やと思つてゐるに情けない。盃せぬが幸せとは、あ
んまり聞こえぬ光義様。祝言さへも済まぬうち、討
死とは曲がない。わしやなんぼうでも殺しはせぬ。
思ひ留つて給はれ」

と、縋り嘆けば

「ア、コレ、こなたも武士の娘ぢやないか。十次郎
が討死はかねての覚悟。祖母様に泣き顔見せ、もし
悟られたら未来永々縁切るぞや」

「エ、」

「サア、とかう言ふうち時刻が延びる。その鎧櫃
こゝへ、こゝへ」

「アイ、アイ」

「サ早う。時延びる程不覚のもと。エ、聞分けな
い」

と叱られて

「いとしい夫が討死の、門出の物具つけるのが、ど
う急がるゝものぞいの」

と泣く／＼取り出す緋緘の、鎧の袖に降りかゝる、
雨か涙の母親は、白木に土器白髪の婆、長柄の銚子
蝶花形、門出を祝ふ熨斗昆布、結ぶは親と小手躰当、
六具かたむる三々九度、この世の縁や割小ざね、猪
首に着なす鍬形の、あたり眩ゆきいでたちは、さは
やかなりしその骨柄

「フ、あつぱれ武者ぶり勇ましゝ。高名手柄を見る
やうな、祝言と出陣を一緒の盃。サア／＼はやう、
めでたい／＼嫁御寮」

と、悦ぶ程なほいや増す名残り『こんな殿御を持ち
ながら、これが別れの盃か』と、悲しさ隠す笑ひ顔
「随分お手柄高名して、せめて今宵は凱陣を」

と、跡は得言はず喰ひしぼる、胸は八千代の玉椿、
散りて果敢なき心根を察しやつたる十次郎、包む涙
の忍びの緒、絞りかねたるばかりなり。哀れをこゝ
に、吹き送る、風が持て来る攻め太鼓、気を取り直
しつゝ立ち上り

「いづれもさらば」

と言ひ捨てゝ、思ひ切つたる鎧の袖行方知らずなり
にけり

「ノウ悲しや」

と泣き入る初菊、母も操も顔見合はせ

「祖母様」

「嫁女、可愛や、あつたら武士を、むぎ／＼殺しに

やりました。ノウ初菊。十次郎が討死の出陣とは知りながら、なまなか止めて主殺しの憂き死恥をさらさうより、健気な討死させんため、祝言によそへて盃をさしたのは、暇乞ひやら二つには心残りのないやうと、思ひ余つた三々九度。祖母が心のせつなさを、推量しや」

とばかりにて、初めて明す老母の節義、聞く初菊も母親も、一度にどうと伏し転び、前後不覚に泣き叫ぶ。襖押明け何気なうつか／＼出づる以前の旅僧

「コレ／＼かみさま、風呂の湯が沸きました。どなたぞ、お入りなされませ」

と言ふにこなたは泣き顔隠し

「フ、それは御苦労、さりながら年寄に新湯は毒。跡は若い女子ども、マアお先へ御出家から」

「いかさま、湯の辞儀は水とやら、左様ならば御遠

慮なし、お先へ参る」

と立上がれば、三人は涙押包み、奥の仏間と湯殿口入るや

月漏る片庇、こゝに苳り取る真柴垣、夕顔棚のこなたより、現はれ出でたる武智光秀

「必定、久吉この内に忍びゐるこそ究竟一。たゞ一討ち」

と気は張弓、心は矢竹藪垣の、見越しの竹をひつそぎ槍、小田の蛙の啼く音をば、留めて『敵に悟られじ』と、差し足抜き足、窺ひ寄り、聞こゆる物音、

『心得たり』と、突つ込む手練の槍先に、『ワツ』

と玉ぎる女の泣き声、『合点行かず』と引き出す手負ひ、真柴にあらで真実の、母のさつきが七転八倒

「や、ヤ、ヤ、こは母人か、為成したり。残念至

「極」

とばかりにて、さすがの武智も仰天し、たゞ呆然たるばかりなり。声聞き付けて駆け出る操、初菊もろとも走り出で

「ノウ母様か情けない。このあり様は何事」

と縋り嘆けば、目を見開き

「ヤレ嘆くまい〜。内大臣春長といふ、主君を害せし武智が一類。斯く成り果つるは理の当然。系図正しきわが家を、逆賊非道に名を穢す、不孝者とも悪人とも、たとへがたなき人非人。不義の富貴は浮かべる雲、主君を討つて高名顔、たとへ將軍になつたとて、野末の小屋の非人にも、劣りしとは知らざるか。主に背かず親に仕へ、仁義忠孝の道さへ立たば、もつさう飯の切り米も、百万石に勝るぞや。おのれが心たゞ一つで、しるしは目前これを見よ。武

士の命を断つ、刃も多いにこの様な、引つそぎ竹の猪突き槍。主を殺した天罰の、報ひは親にもこの通り」

と、槍の穂先に手をかけて、ゑぐり苦しむ気丈の手負ひ、妻は涙にむせ返り

「コレ見たまへ光秀殿、軍の門出にくれぐも、お諫め申したその時に、思ひ止まつて給はらば、かうした嘆きはあるまいに。知らぬ事とは言ひながら、現在母御を手にかけて、殺すといふは何事ぞいなう。せめて母御の御最期に、『善心に立帰る』と、たつた一言聞かしてたべ。拝むわいの」

と手を合はし、諫めつ泣いつ一筋に、夫を思ふ恨み泣き、操の鑑曇りなき、涙に誠あらはせり

折しも聞ゆる陣太鼓、耳を貫く金鼓の響、『あはや』と見やる表口、数ヶ所の手傷に血は滝津瀬、刀を杖

によるぼひく、立帰つたる武智が一子、庭先に大息継ぎ

「親人くこれにおはするや」

と、言ふも苦しき断末魔、見るに驚く母親より娘は傍に走り寄り

「ナウいたはしや十次郎様。祖母様といひお前までこの有様は情けない。お心確かに持つてたべ、やいのく」

と取り付いて、介抱如才泣くばかり。光秀わざと声あらゝげ

「ヤア不覚なり十次郎、仔細はなんと、様子はいかに。つぶさに語れ」

と呼ばはれば、『はつ』と心を取直し

「親人の指図に任せ手勢すぐつて三千余騎、浜手の方に陣所を固め、今や帰国と相待つくところに、敵

はそれとも白浪の、艦を押切つて陸路に漕ぎ付け、追ひく都へ馳せ上る、真柴の軍勢ごさんなれと、

関を作つて味方の軍兵縦横無尽に難立つれば、不意を打たれて敵は敗亡、狼狽へ騒ぐを追つ立て、追つ詰め、こゝを先途と戦ふうち、後ろの方より大音声。

『真柴筑前守久吉の家臣加藤正清これにあり、逆賊武智が小わつぱ共、目に物見せてくれんず』と、言ふより早く太刀抜きかざし、四角八面に切立てられ、またく間に味方の軍卒、残らず討死仕り、無念ながらもたゞ一騎立帰つて候」

と、息継ぎあへず物語れば。光秀怒りの髪逆立て

「ヤアいひ甲斐なき味方の奴ばら。シテ四王天田島頭は」

「さん候四王天は、目指すは久吉一人と、昨朝よりの一騎駆け。乱軍なれば生死の程も、確かにそれと

承らず。親人の御身の上进心にかゝり候故、未練にも敵を斬り抜け、これまで落ち延び帰りしぞや。この所に御座あつては危し〜。一時も早く本国へ引き取り給へ、サア早く〜」

と、深手を屈せず父親を、氣遣ふ孫の孝行心、聞くに老母はせきかねて

「アレ、あれを聞きや嫁女、その身の手傷は苦にもせず、極悪人の倅めを、大事に思ふ孫が孝心。ヤイ光秀、子是不憚にはないか、可愛いとは思はぬかやい。己が心たゞ一つで、いとし可愛い初孫を、忠と義心に健気なる討死でもさす事か。逆賊無道の名を穢し、殺すはなんの因果ぞ」

と、せぐり苦しき老いの身の声聞きつけて十次郎「ヤア〜、そんなら祖母様には、ご生害あそばしたか。今生のお暇乞ひ、今一度お顔が見たけれど、

もう目が見えぬ。父上、母様、初菊殿。名残り惜しや」

と手を取つて、妹背の別れ愛着の、道に引かるゝいぢらしさ、母は涙に正体なく

「討死するは武士の、習ひといへど情けない。十八年の春秋を刃の中に人と成り、いつ楽しみの際もなう弓矢の道に日をゆだね、今朝の門出のその時にも『母様今日の初陣に、天晴れ高名手柄して、父上や祖母様に誉めらるゝのが楽しみ』と、につと笑うたその顔が、わしや幻にちらついて、得忘れぬ」

と口説き立て、口説き立つれば初菊も

「ほんに思へばこの身程果敢ない者が世にあらうか。解けて逢ふ夜のきぬ〜も永き名残りの許婚、二世を結ぶの枕さへ、交はず間もなうこの様な、悲しい別れをすることは、マどうした罪か情ない。私

も一緒に殺してたべ、死にたいわいな」

と身を悶え、互ひに手を取り交はし、名残り涙の暇乞ひ、見るに目もくれ心消え、母も老母も声を上げ、『ワツ』とばかりに取り乱せば、さすが勇気の光秀も、親の慈悲心子故の闇、輪廻の絆に締めつけられ、堪え兼ねて、はら／＼、雨か涙の汐境、浪立ち騒ぐごとくなり

またも聞こゆる人馬の物音、矢叫びの声かまびすく、手に取る如く聞こゆれば、光秀聞くより突つ立ち上り

「アノ物音は敵か味方か。勝利如何に」

と庭先の、すね木の松が枝踏みしめ／＼よぢ登り、眼下の村手をきつと見下し

「和田の岬の弓手より、おひ／＼続く数多の兵船、間近く立つたる魚鱗の備へ、千成瓢の馬印は、疑ひ

もなき真柴久吉。風をくらつてこの家を逃げ延び、

手勢引つ具し光秀を討つ取る術と覚えたり」

と言ふより早く、ひらりと飛び下り

「草履掴みの猿面冠者、イデーひしぎ」

と身繕ひ、勢ひ込んで駆け出だせば

「ヤヤ／＼武智光秀しばらく待て。真柴筑前守久吉、対面せん」

と呼ば／＼つて、三衣にかはる陣羽織、小手膺当も優

美の骨柄、悠然として立ち出づれば。光秀見るより

仰天し、駆け戻つてはつたと睨み

「ヤア珍らし、真柴久吉。武智十兵衛光秀が、この

世の引導渡してくれん。観念せよ」

と詰寄れば

「ホトウ急いたりな光秀。共に天を戴かぬ亡君の弔ひ軍。今この所で討取つては義あつて勇を失ふ道理。

諸国の武士に久吉が軍功を知らさんため、時日を移さず山崎にて、勝負の雌雄を決すべし。が、如何に

〈

「ホ、ウ、さすがの久吉よく言うたり。われも惟任將軍と勅許を受けし身の本懐。ひとまづ都に立ち帰り、京洛中の者共へ、地子を赦すも母への追善。互ひの運は天王山、洞ヶ峠に陣所を構へ、たゞ一戦に駆け崩さん。首を洗つて観念せよ」

「ホ、ホ、ホ、何さ〜。たとへ項羽が勇あるとも、我また孫呉が秘術を振るひ、千変万化に駆け悩まし、勝鬨あぐるは瞬くうち」

と久吉が、詞はゆるがぬ大盤石、たちまち廻り小栗栖の、土に哀れを残すとは、知らず知られぬ敵味方、睨み別るゝ二人の勇者、二世を固めの別れの涙、かゝれとしてしも烏羽玉の、その黒髪を敢え無くも、

切り払うたる尼ヶ崎、菩提の種と夕顔の、軒にきらめく千成瓢箪。駒のいなゝき迎ひの軍卒、見渡す沖は中国より追々入り来る数万の兵船、威風りんくは凜然たる、真柴が武名仮名書きに、写す絵本の太功記と、末の世までも残しけり